

力石咲 ステイトメント

ニットで温かな世界征服。これがわたしのミッションだ。

編み物との出会いは2004年の作品《ManGlobe》である。人は毛糸や編み物に対し、どんなイメージを抱くだろうか。多くの人は、温かく柔らかで、やさしいというイメージをもっているだろう。わたしもそうだ。よって、世界とのコミュニケーションをコンセプトに制作した《ManGlobe》を編み物で形成したのはごく自然なことだった。この作品で、一本の糸が面となって無限に広がっていく不思議さ、ものに覆いかぶさった時に中身の形状に従順に形を変える可変性、無機的なものを有機的に変換してしまう柔軟性という編み物の性質に惹かれ、可能性を探りながら創作活動を開始した。

2009年の《トラベリビング》をきっかけに、わたしは編み物を外に連れ出した。2週間のゴールドコースト滞在中、現地での生活や観光をしながら作品をつくるこのプロジェクトでは、部屋に籠って作品を作るのではつまらない。自分が訪れた先々のものとコミュニケーションして自分の痕跡を残していこうと、出会った人やビーチの流木、街中のベンチを即興で編み包んだ。すると編み包まれた人と他者、流木と人、ベンチと人とのコミュニケーションも生まれたのである。

編み物は紐状の素材があれば場所を選ばずどこでもできる。そしてそんな原始的であるがゆえに世界中の人が知っている技法なのだと思う。ニットに対する先入的なイメージや日常の風景があるから、街中のものが編み包まれているという状況が違和感になって、人とも、人と人との新たなコミュニケーションが生まれる。《トラベリビング》から始まった、新たなコミュニケーションを紡ぐプロジェクトは《旅するニットマシン》《ニット・インバーダー》によって、人と空間、人と街を繋ぐものへと拡張している。

わたしにとって編み物はコミュニケーションメディアである。一本の糸が編まれて面となりどんどん広がっていくように、私と対象物から始まったコミュニケーションが、対象物と鑑賞者、鑑賞者と鑑賞者へと多角的に広がっていくことを願う。人間と土地、空想と現実、さまざまな関係性やその背景に着目しながら編み物で包んでゆく作業は、世界をゆるやかに繋いでゆく作業であり、壮大なインスタレーションの一端である。

プロジェクトの遂行に周囲の人を巻き込む、という点にもわたしは重きを置いている。例えば《ニット・インバーダー》では街を編み包む作業（インバージョン）を地元の人々と共に行う。インバーダーとして共に街に介入していくことでわたしは彼らとの絆を日々感じていく。彼らは自分の住む街を改めて発見するかもしれない。そして今度は、インバージョンされた街がインバーダー以外の市民とも新たな関係を構築していくだろう。

プロジェクトは一時的なもので、また元の風景に戻る。それはニットのように儂くささやか。しかし非日常の空間を体感した記憶や共にプロジェクトを遂行した者同士の絆、街と主体的に関わった記憶はいつまでも残る。そんなプロジェクトを手がけていきたい。